ロマン・ロラン
ジャン・クリストフ
2
27

世界文學全集
27
河出書房

世界文学全集

ロマン・ロラン

ジャン・クリストフ

2

片山敏彦訳

河出書房

© 1969

カラー版　世界文学全集　第27巻

ロマン・ロラン　ジャン・クリストフ2

昭和 42 年 1 月 15 日初版発行
昭和 44 年 7 月 1 日3版発行

訳　者　片山敏彦
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
印刷者　澤村嘉一
印　刷　凸版印刷株式会社
発行所　株式会社　河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6
電話　東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座　東京　10802

定価 850 円

製　本・和田製本工業株式会社
製　函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表　紙・日本クロス工業株式会社

目　次

ジャン・クリストフ

2

6 アントワネット……5
7 家の中
第一部……75
第二部……120
8 女友だち……191
9 燃え立つ茂み
第一部……311
第二部……365
10 新しい日
第一部……439
第二部……464
第三部……509
第四部……533
ジャン・クリストフへの告別……560
年表……563
ヴィラ・オルガの思い出……571

巻頭口絵　ロマン・ロラン頭像（テラコッタ）
高田博厚作（三木淳撮影）

本文カラーさし絵
ピエール・ルロワ
© Éditions Albert Guillot, Paris

装　幀　亀倉雄策

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジャン・クリストフ　2

片山敏彦訳

主要人物

ジャン・クリストフ　幼い時から音楽を愛し、不屈の精神をもったこの物語の主人公。
ジャンナン家　フランス中部の旧家。信望ある銀行家。
アントワネット　ジャンナン家の娘。両親の不運の死と没落の後、健気に弟を養育する。
オリヴィエ　アントワネットの弟。クリストフの親友となり、フランスの真精神へクリストフをみちびく。
ポワイエ夫人　ジャンナン夫人の冷淡な姉。
ナタン夫人　アントワネットに同情する富裕な社交界夫人。
グリューネバウム家　尊大で非人情な、ドイツの上流家庭。
アルノー夫人　善良でもの静かな教授夫人。夫妻ともに音楽や書物を愛し、クリストフのよき友人となる。
タデー・モーク　クリストフとオリヴィエに助力する親切なユダヤ人。
アルセーヌ・ガマーシュ　傲慢不遜なパリの大新聞の主筆。
エルスベルジェ兄弟、ワトレ氏、コルネイユ神父、シャブラン少佐、セリーヌ、ヴェイユ夫妻、ジェルマン夫人　いずれもクリストフと同じアパートに住む人々。
ジャックリーヌ・ランジェー　富裕な社交界の娘。両親の反対を押しきってオリヴィエと結婚する。
マルト叔母　ジャックリーヌによい感化をあたえた老婦人。
セシール・フルーリー（フィロメール）若い音楽家。のちオリヴィエの赤ん坊の養母となる。
フランソワーズ　有名な悲劇女優。友情からクリストフと結ばれる個性的な女性。
グラチア　かつてクリストフのピアノの弟子であったイタリー女性。美しい外交官夫人としてふたたび現われる。
ピエール・カネー　富裕な市民の家庭にそだち、革命的思想をもつ。
マヌース・エイマン　革命主義の亡命ロシヤ人。
ジュシエ、コキャール　ともに労働運動の指導者。
オーレリー　革命主義者のたまりであるカフェのやさしい主婦。
フイエットおとっつぁん　靴直し人。
エマニュエル　フイエットの孫。せむしの暗い運命からオリヴィエの決定的な感化を受け、苦学して詩人となる。
トルイヨー　フイエットの近所の紙屋。
ブラウン　クリストフの幼ななじみ。スイスで医師を開業している。
アンナ　ブラウンの妻。古い因習や道徳にしばられて、暗い情熱を抱いている。
アウロラ　グラチアの娘。朗らかな少女。
リオネロ　グラチアの息子。病的で嫉妬ぶかい少年。
ジョルジュ　オリヴィエの遺児。行動的で快活な少年。

6 アントワネット

わが母に

ジャンナン一家は、数世紀以来フランスの地方の同一の個所に住みつづけて血統に外国の血を少しもまじえない、フランスの古い家庭の一つであった。社会のあらゆる変動にもかかわらず、フランスにおけるこんな家庭の数は今でもまだ思いのほか多いのである。そんな家庭が知らず知らずのうちに深く根づいている土地からそれらを引っこ抜くほどの変動があるとすれば、それはよほどつよい変動であるにちがいない。住みついた土地へのこんな愛着の理由を問うてみればそれは大した理由ではないし、それによる利益といっても微々たるものだし、家柄の過去の歴史を回顧する博学な感傷主義というものを考えてみても、そんなものはただ数人の文人が大事がるだけのことである。目に見えない愛着のきずなをつくっている力は、最も粗野な人々にも最も聡明な人々にも共通な、漠然としで力づよい感情——すなわち、数百年来自分がこの土地の一片であり、この土地の生命を自分も生きており、この土地の空気を呼吸しており、土地の心臓の鼓動が自分たちの心臓に触れてうつ音を聞いており、それはまるでおなじ寝台でともに寝るふたりの人間のようなぐあいであり、またその土地のかすかな無数のおののき——時間と季節との、晴れた、あるいは曇った日々の数限りないニュアンスと、いろいろなものの声と沈黙とをとらえることの感情なのである。そして、それが最もみごとな土地というわけでもなく、またそこでの生活がどこの生活よりも楽しいためにその土地に愛着するというのでもない。むしろそこでは土地柄がきわめて単純であり、じみであり、人間にきわめて近いものであり、そして人間に親密な語りかけをする。

ジャンナン一家が住んでいたのは、フランスの中ほどにあるそんな地方であった。平たんでしめりけのある土地、眠りこんでいるような古い小さな町——それはその退屈そうな顔を一本の静かな運河の、曇っている水に映している。町の周囲には、同じような形のたくさんの畑地、耕地、牧場、小川、大きな森、それからまた同じような畑地……絶景というようなものはないし、めぼしい記念物もなく、名物もない。何ひとつ、この町へ人々を引きつけるにたるものがない——すべては、人々を町のなかにじっとさせておくようにできている。この麻痺状態とこの眠たい気分との中に一つの秘密な力がある。こんな眠たい、しびれているような気分を初めて味わう人々の精神は、そのために悩んで反抗する。しかしすでに数世紀間もその気分の感化を受けてきている者はもはやその感化から離れることはできまい。彼はそれによって、髄までひたされている。すべてがじっとして動かずにいるこの状態、調和のあるこの退屈さ、この単調さが、彼には一つの魅力であり、一つの深い甘美さであり、その理由を突きとめることはできないままに彼はそれをけなしながら愛する。そして彼はそれを忘れることはできないだろう。

*

この土地にジャンナン家は住みつづけてきた。この家庭の系譜をさかのぼってしらべてみれば、町の中と町の近郊とにおいて十六世紀までもその跡をたどることができた。というわけは、もちろん次のようなひとりの大伯父がこの家系にあって、その人が、この家族の勤勉で無

名でささやかな人々の系図を作りあげるのに生涯じゅうの努力をついやしたからである。それによってみればこの家族の先祖は、農民、小作人、村の手職人、それから聖職者、いなかの公証人、そしてしまいには、公証人として管区長官舎に定住して、そこでオーギュスタン・ジャンナン――現在のジャンナン家の戸主の父にあたる――は銀行家として大いに手ぎわよく事務をとった。利口な人物であって農民的な抜けめなさとしんねり強さとをもちながら常に正直で、しかし過度に気を配るというたちではなく、たいそう勤勉であると同時に生活の楽しみをぞんぶんに味わうことが好きで、世故にたけている温厚さと、思ったことをなんでも遠慮なしに言う淡泊さと、そして彼の栄達とによって十里四方で畏敬されていた。ずんぐりしてがんじょうで強壮な体格で、大きな、赤い、あばたの顔の中に小さな目がいきいきとしている彼は、かつては大いに浮き名を流したものである。そしてその好みをまだすっかりなくしてはいなかった。いささかぶしつけな冗談を言うこととうまい料理とを彼は好んでいた。食卓における彼こそ特色を発揮している彼であった。そしてそのとき彼のむすこのアントワーヌは、数人の親友たち――いずれも同類というべき人柄の親友たちとともに父の食卓の相手をしたが、これらの友は、治安裁判所判事、公証人、大司祭といったような面々で――（老ジャンナンは、坊主なら取って食いたいほうの人間だったが、しかし坊主が大いに食う坊主ならともに食うことを好んだ）――彼らはみなラブレーが描いた人物たちのモデルみたいに頑健で陽気な男たちだった。とてつもない冗談が連続し、それに伴ってテーブルをげんこでたたく音や怒号みたいな高笑いがひびいた。こんな陽気な気分の震動は、台所の召使いたちや外の通りにいる隣人たちにまで感染するのだった。

それから老オーギュスタンは肺炎にかかったのだが、それは、夏のひどく暑い日に、ぶどう酒をたるからびんへ注ぐために、上着なしのシャツの姿のまま地下の穴倉へおりて行ったためだった。二十四時間のうちに彼はべつの世界へ――彼がその存在を信じていなかったあの世へ出発してしまった。地方の善良な市民であるとともにヴォルテールの徒であった彼にふさわしくカトリック教会による終油の式はことごとくとり行なわれた。彼のような人間は臨終のときには我意を張らず、それによって婦人たちの気のすむようにしてやるが、けっきょくどちらにしても彼自身にとっては同じことだからでもある……それに、どちらにすべきかは決してはっきりわかりはしないからである……

むすこのアントワーヌが父の業務を継いだ。彼はでっぷりした小男で、血色のいい快活な顔つきで、英国式のほおひげだけを残して顔はきれいにそっており、明瞭でない話しぶりで早口にしゃべり、それが非常に大声であり、それに伴ってこまかい、びんしょうな身ぶりをたくさんするのであった。父がもっていた理財の才が彼にはなかった。しかしかなりすぐれた管理者ではあった。つづけてやっていさえすればふとっていく一方である今までの経営を彼はそのままやっていればそれでいいのだった。仕事の成功の実績は彼自身にはあまりなかったとはいえ、彼はりっぱな腕まえの実務家だという評判をその地方で得ていた。成功へ彼自身が寄与したものといえば、きちょうめんなことと勤勉な執務とだけだった。とにかく完全に廉直な人物である彼は、どこへ行っても当然なだけの信用を博していた。まったく人づきのいい朗らかな態度――もっともある人々に言わせれば、あまりに親しさを示しすぎ、あまりにも感情をぶちまけすぎ、あまりにも庶民的すぎるのだったろうが――によって彼は、この小都市とその周囲とで、押しも押されもしない声望を得ていた。金銭をふんだんに与えはしなかったが感情をふんだんに施した。彼の目にはすぐに涙がうかんできた。他人の悲惨なありさまを見ると心から同情した。そしてその同情のしかたが、不幸な当人に感銘を与えずにはいなかった。

小都市の大多数の人においてそうであるように、政治が彼の考えの中に大きな位置を占めていた。彼は熱烈な、そして穏健な「共和主義者」であり、寛容でない「自由主義者」であって愛国者であり、またその父を手本にして極度に反聖職主義者であった。彼は市参事会員の

ひとりであり、彼の同僚たちにとってと同様に彼にとっての一つの楽しみは、小教区聖堂の「キュレ（主任司祭）」や、四旬節に精進を説いて大いに町の貴婦人連に感銘を与えた説教者の鼻をあかしてやることだった。フランスのかずかずの小都市のこんな反聖職主義は、常に多少とも家庭内部の戦争の種であり、夫たちと妻たちとのあいだのあの暗々裡の、そしてはげしい争いの、伏在的な一つの形――それはほとんどどの家庭の中にも見られる――だということは、忘れてはならないことである。

アントワーヌ・ジャンナンはまた文学上の自負をも持っていた。彼の世代の地方人士たちと同様に彼はラテン語の古典的な書物による教養を受けていたのでそんな古典の数ページを暗記していたし、またラ・フォンテーヌとボワロー――Art poétique『詩学』の著者としての、またとくに『リュトラン（聖堂合唱隊の譜面台）』の著者としてのボワロー――と、La pucelle『オルレアンの少女』の著者「ヴォルテール」と、十八世紀フランスの「詩人たち」――この詩人らの趣味にならって彼は自作をいくつか作ってみたが――から覚えたたくさんの格言を暗記していた。彼の仲間の中でこんな文学好きの傾向をもっているのは彼だけではなかった。しかしとにかくこれがジャンナンの評判を高めていた。彼の作った韻文のおどけことばや、四行詩や、題韻詩（与えられた韻を踏んで作った詩）や、アクロスチッシュ（折句）（各行頭（末）の文字を集めると語または句となる詩形）や、諷詩や、小唄を人々はたびたび引用して口ずさんだ――それらのあるものはかなり不作法なもので、一種の肉感性を帯びてはいたが。消化作用の神秘もまた彼の作詩の中でうたわれていた。ロワール地方の「詩神」は、彼女のらっぱをダンテの有名な悪魔に見ならったしかたで吹き鳴らす――

……Ed egli avea del cul fatto trombetta……

……さて彼はしりのらっぱを持ちたりき……

頑健で陽気で活動的なこの小柄の紳士は、まったく性質の違う女と結婚していた――それは同じ地方の司法官の娘、リュシー・ド・ヴィリエであった。ド・ヴィリエ家、あるいはむしろドヴィリエ家――というわけは、この家名は、ながい時のふるままに、ちょうど山の傾斜をころがり落ちながら一つの小石が二つに割れるように、ドヴィリエがド・ヴィリエと二つに割れた（「ド」は貴族的な家名に付けられる）のである――は代々の司法官で、古くからのフランスの国会議員の家柄であり、法律と義務と社会的礼節と個人の尊厳と、またとりわけ職掌上の尊厳――それは、ほんの少しばかり頑迷固陋の色合いをまじえながら申しぶんのない正直さによって強められていたが――について、りっぱな堂々たる考えを保持していた。前世紀にこの家系は、現世にたいして宗教的な不満のぐちをこぼすジャンセニスムの精神にいくらか感化された。そしてそれ以来この家族の中には、ジェスイット精神にたいする軽蔑心があると同時に、何かしら厭世的な、いくらか不平がましい精神態度が伝わって残っている。彼らは人生を明るい見方で見ようとしなかった。そして人生が提出するいろいろな困難を平坦にしようとするよりむしろ、それらの困難を増すことによってそれらについて嘆く権利を保留するというふうであった。

リュシー・ド・ヴィリエはそんな特徴をいくつかもっていたが、それらは、彼女の夫の、あまり洗練されていない楽観主義と対立するものであった。夫よりもゆうに頭の高さだけ背が高くやせ型でかっこうがよく、身なりについてすぐれた趣味をもっていたが、そこにはいくらか堅くるしい上品さが感じられて、そのためにじっさいよりもいくらかふけて見えたが、彼女はいつでもわざとそうしているらしかった。非常に高い道徳上の価値が彼女に備わっていたが、しかしまた他人にたいして厳格であった。どんな過失をも、いや、ほとんどどんな癖をさえも許容しなかった。冷たくて高慢な女性のように人々から思われていた。彼女は宗教上の信仰において非常に敬虔であったが、それがいつでも夫婦間の口げんかの種になった。とはいえこの夫婦はた

がいにたいそう愛し合っていた。そしてロげんかをしているときでもたがいに相手を必要としていた。一方が他方よりずっと実際的だというわけではなかった。夫は、人の心理を見ぬく才能を欠いていることのために非実際的だったし、――（親切ごかしの顔つきやうまい言葉にのせられるおそれがあった）――妻は事務的な仕事をまったく経験したことがないために非実際的だった――（彼女は事務的な仕事からはいつでも離れて暮らしていたために、そんな仕事にはぜんぜん興味をもたなかった）

*

彼らにはふたりの子供があった。姉娘のアントワネットは男の子オリヴィエより五つ年上であった。

アントワネットは褐色の髪をもつ美しい少女であって、顔は優雅で誠実そうな、いかにもフランス的な小さな丸顔であり、目はいきいきとして、ひたいはおでこで、あごはほっそりとじょうひんで、鼻は小さく、まっすぐだった。――（フランスの昔のある肖像画家が言ったよっに）「その鼻には、認めにくいほどかすかな表情のうごきが現われ、そのため顔つき全体が活気づけられ、彼女が話したりきき入ったりするにつれて、内心の動きの精妙さを外へ示すような、じょうひんでみごとな、最も美しい」というべきそんな鼻だった。彼女は父から快活さとのんきさとをうけ継いでいた。

オリヴィエは小柄できゃしゃな金髪の少年で、小柄という点では父に似ていたが性質はまったくちがっていた。幼いころたてつづけに病気をしたために彼の健康はそこなわれていた。そのため家庭のみんなから特別だいじがられていたとはいえ、からだが弱いためにこの少年は早くから、死を恐れており、そして生きてゆくための身づくろいができていない子供であり、絶えず夢みがちでメランコリックだった。いつでもひとりぼっちでいたが、それは内気のためでもあり、またひとりでいるのを好むためでもあった。ほかの子供たちといっしょになるのを避けた。いっしょにいると気づまりだからだった。ほかの子供たちの遊びや戦争ごっこが彼はきらいだった。彼らの乱暴なのがいやだった。彼らからなぐられても抵抗しなかったが、それは彼が勇気のないせいではなくて、もし自己防禦をするとそれによって他人を傷つけはしないかと心配するための内気さからだった。もしも彼が父の身分の良さに保護されているのでなかったとしたら、彼は仲間の少年たちからひどい目にあわされたことだろう。彼は気がやさしくて病的なほど感じやすかった。たった一つの言葉、共感のたった一つのしるし、一つのこごとを受けるだけでも涙をこぼして泣きだすのであった。彼よりもはるかに健康な姉は彼をからかい、そして彼のことを「ちっちゃな泉さん」と呼んでいた。

ふたりの子供は心から愛し合っていた。しかしいっしょに生活するにはあまりにも性質がちがいすぎていた。それぞれ自分の性質にしたがってそれぞれの空想に生きていた。成長するにつれてアントワネットはますますきれいになった。人々がそのことを彼女に向かって言い、そして自分が美人であるのを彼女は自覚した。そのために幸福を感じて、自分の未来のためにいろいろと小説じみた夢を作り出していた。病気で陰気なオリヴィエは外界とのどんな接触によっても絶えず心をきずつけられ、自分自身の奇妙な思想の小さな世界の中へ逃げこむのであった。彼はいろいろな話を思いついては、それらを自分自身へ話して聞かせていた。愛し、そして愛されたい熱烈な、女性的な要求を彼はもっていた。そして、自分と同年輩の少年たちの仲間入りをせずにひとりぼっちで暮らしながら二、三の友だちを自分の空想から作り出していた。ひとりはジャン、もうひとりはエチエンヌ、三人目はフランソワと名づけられた。オリヴィエはいつでもこれらの友といっしょにいた。そのために彼は、彼の周囲の実在の人々とちっともいっしょにいないわけだった。彼はたくさん睡眠しなかった。そしていつでも夢を見ているような気分の中にいた。朝、寝床から引っ張り出されると、夢みながら忘我の状態で裸の両足を寝床のふちからぶらさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

げ、あるいはまた――たびたびそんなことがあったが――両方のくつ下を一つの足に重ねてはいていた。洗面器の水に両手をつけたままでやっぱり夢を見つづけていた。机に向かって一行書いては夢想にひたり、授業を受けながらもそうだった。何時間も空想にふけった後に、なんにも学課を覚えていなかったことに急に気がついてぞっとした。食卓で人に話しかけられるとわれに返ってどぎまぎした。問いかけられてから二分も過ぎたあとでやっと返答した。話している途中で、自分が何を言おうとしているのかもうわからなくなるのだった。自分の思想のざわめきのなかにひたって生きており、ゆるやかに流れ去る単純な田園生活の日々の親密な感覚の中にひたされて生きていた。大きな家の一部にしか家族が住んでいないので家は半ばがらんとしていた。地下の穴倉と、大きな屋根裏部屋とはこの少年に恐怖を起こさせた。よろい扉をおろし、家具におおいをかけてあり、鏡のおもても包んであり、シャンデリアに笠をかぶせてある、とざされている室内は秘密めいていた。一家の人々の古い肖像画は、それをみる少年の心につきまとって離れないような微笑をうかべていた。帝政時代の版画には、美徳を誇示しながらみだらがましい一種の英雄趣味がくっついていた。――「娼婦の家にいるアルキビアデスとソクラテス」「アンチオクスとストラトニース」（古代ギリシャの美女ストラトニースはシリアの王ニカトールの王妃となり、後にその王のむすこアンチオクスと再婚した）「エパミノンダスの物語」「こじきをするペリゼール（ビザンチンの将軍）」……家の外からは、通りの向かい側のかじ屋から蹄鉄工の音がきこえてきた。それはつちが鉄床をたたく、びっこの踊りみたいなリズムだった。鼻息の音のようなふいごの音。焼けるひづめの臭気。水辺にしゃがんで洗たくをしている女たちが洗ったものをたたく音。隣の肉屋の肉切りぼうちょうがたてる鈍い音。通りの敷き石の上に鳴る馬の足音。ポンプがきしむ音。運河の上で旋回開閉橋の旋回するのが見えた。材木を積んでいた重たそうな船が一本の大綱にひかれてゆっくりと川べりの庭の前を過ぎて行った。石畳を敷いてある小さな中庭の中の狭い土の部分に二本のリラの木がはえて、ゼラニウムとつくばね朝顔の花壇に囲まれていた。そして運河を見おろすテラスの上には、花咲いている月桂樹とざくろの木とのはち植えがあった。またときどきは近くの広場から市のにぎわいがきこえてきたが、そこにはぴかぴか光る青い仕事着の農夫たちや、ぶうぶうとなく豚が来ていた……そして日曜日の聖堂の内部――歌いそこなう歌い手、ミサを誦しながらこくりこくり居眠りをする老主任司祭。停車場の並木通りを家族づれでする散歩、そのときやはり家族づれの散歩を義務みたいに心得てやっている他の気の毒な人々に礼儀正しく脱帽してあいさつをすることばかりにその散歩の時間がついやされた。それからしまいには日光の照っている野原まで来ると、空の中で、姿は見えないひばりたちがさえずっていた。――あるいはまた、どんよりとした運河の水鏡に沿うて歩くと、その両岸に立ち並ぶすんなりとした白楊樹がこきざみにふるえていた……それから、日曜日のいなかふうの晩さんになり、いつまでも食べつづけて、うれしそうにこまごまとごちそうの通人ぶりが発揮される会話がつづいた。なぜならこのごちそうに招かれるのはみなそろいもそろってその道のくろうとばかりだったのである。そして食道楽は地方の生活では、だいじな行事であり、「芸術」の最たるものなのである。それからまた取引き関係のことも話題にのぼり、昔ながらのゴール人式な、とほうもない冗談が飛び出し、そしてときどきまたいろいろの病気のことが微に入り細にわたって話された――……少年は、いつでも自分がすわる一隅にじっとして、一匹の小ねずみほども音を立てずに、食べものはほとんど食べず、少しずつかじるようにして食べながら、全身を耳にして話をきき取っていた。何ひとつ聞きもらさなかった。聞いてもよく理解のできないことは自分の想像力でおぎなっていた。彼には、数世紀の跡形があまりにも濃くつけられているようなふるい家柄の子らにしばしば見られるあの独特の天分があった――すなわち、自分がまだ一度も心に持ったことがなく、ほとんど理解のできないようないろいろな思想を予測的に直観してつかむ天分があった。――それもまた料理場のようなもので、血液と生命の汁

との神秘な調整が、ここで洗練されてきた。それから、思わずふきだすようにおかしいおとぎばなしや、ぞっとするようなおとぎばなしをしてくれる女中……そして日の暮れのことが最後に言われなければならない。こうもりたちが音もなく飛ぶ。ふるい家の奥のあちこちで化けて出てくるような気のする妖怪じみた生きものにたいする恐怖。でっかいねずみと、毛のはえている大きなくも。それから寝る前に寝台の足もとでするお祈り。そのとき、自分でとなえる祈りのことばをほとんど自分では聞いていない。隣の修道院から小さな鐘の、しゃがれた音がきこえる。それは修道女らに就寝の時刻を告げるのだ——まっ白な寝床、夢の島……

一年じゅうでいちばんすばらしかったときというのは、春と秋とに、町から数マイルはなれたところにある、自分の家の別墅で暮らした日日であった。そこでは思いのままに空想することができた。だれにも会わなかった。大多数の市民的家庭の子らと同じようにこの姉と弟も、召使いたちや小作人など庶民層の人々から引き離されて暮らし、またこれら庶民層の人々はけっきょくのところふたりの子供の心にいくらかの恐怖心と嫌悪とを感じさせていた。肉体労働者たちにたいする貴族的な——あるいはむしろ実質はブルジョワ的なものである一つの軽蔑心が母からふたりの子らに伝わっていた。オリヴィエは一本のとねりこの木の枝の高いところに鳥みたいにとまって、ものめずらしい物語のかずかずをそこで読みながら毎日を過ごしていた——おもしろくてたまらない神話の物語や、ムーゼウス作の、あるいはドルノワ夫人の童話や、『千一夜物語』や旅行奇譚であった。それというのもオリヴィエは遠い国々へのあの奇妙なあこがれを感じており、フランス諸地方の小都市の少年らの心をときどき駆り立てるあの「大洋へのあこがれの夢」を見ていたからである。一つの茂みが彼の目から家を隠していた。そのためにオリヴィエは自分が非常に遠いところに来ているような気持ちになることができた。しかしじつはちっともそうでないことは彼によくわかっていた。それだから安心していられた。自分ひとりで離れていすぎるのも、いやだったのである。彼は自然の中に自分を見失っている気持ちであった。木々は彼のまわりで風に波立っていた。木の葉でできているのぞき窓を通じて、遠方に、黄色く色づくぶどう畑と、まだらのある牛たちが草を食っている牧場とが見え、その牛たちののろいなき声が、眠たげな田園の静かさの中によく聞こえた。おん鶏のするどいなき声が農家から農家へと答え合っていた。納屋の中で鳴る打禾の音の不規則なリトムが聞こえてきた。こんな平穏な状態のただ中に無数の生きものの熱っぽい生活がみなぎっていた。絶えまなくせかせかと動いているありどもの列や、パイプ・オルガンの管みたいなうなりを立てながら獲物をになって行くみつばちや、自分が何を欲しているかを自分でわかっていない、傲然として愚鈍なすずめばちや——どこかへ行き着こうとの意欲に憑かれているらしく忙しそうなこんな動物たちのすべてを、オリヴィエは不安そうな目つきで見まもっていた……どこへ行き着こうとするのか？　それを、その動物たちは知ってはいない。どこでもかまわないのである！　どこかへ、だ……オリヴィエは、こんな盲目的な、そして人間とは敵対関係にある者どもの世界の中でぞっとした。落ちる松の実の音にも、あるいは折れる枯れ枝の音にも、彼は小うさぎみたいに身ぶるいした……そのとき庭の向こうの端から、ぶらんこのつり鎖の音が聞こえてきたのに気づいて急に気持ちが落ちついた。ぶらんこに乗っているのはアントワネットだった。そして彼女は思いきり激しくぶらんこを動かしていた。

アントワネットもまた夢みていた。しかしそれは彼女の空想のしかたにしたがってのことだった。食いしん坊で、好奇心が強くて、笑うことが好きで、ぶどう畑のぶどうの実を一羽のつぐみのようについばみ、樹墻から桃の実をこっそりちぎり、一本の梅の木によじ登り、または通りすがりにこっそりその木をゆすぶって、きん色に熟している梅の実の雨を降らせ、その実を口に入れると、かおりのいいはちみつみたいに舌の上で溶ける。そんなふうにして彼女は日を送っていた。折り取ることは禁じられている花々を彼女は摘み取りもした。朝から

ほしくてたまらなかったばらの一輪をすばやく摘み取ると、それを持って庭の奥の亭の中ににげこんだ。彼女はそこで、酔わせるような薫りの中に、彼女のかわいらしい鼻を埋めて芳香の快さをむさぼり吸った。彼女はその花に口づけし、その花をかみ、その花をしゃぶった。そしてそれから自分のその盗品を隠すためにそれをあごの下のえりもとに押しこみ、小さな二つの乳ぶさのあいだにおいた。そして胸のところでいくらか開いているはだ着の下がふくれあがっているのを彼女はもの珍しそうに見つめた……くつとくつ下とを脱いで、並木道の、ひやりとするこまかい砂の上をはだしで歩き、ぬれている芝生を歩き、日陰にある冷たい石を、あるいはまた日光にやけてあたたかい石を踏んで歩き、森のへりを流れているせせらぎの中を歩き、自分の足と脚とひざとで水・大地・光にさわること、これらも彼女がこっそりと禁を破って味わう楽しさだった。松の木陰に寝そべって、自分の両手を日光にすかして見つめた。そして自分の、上品で肉づきのいい腕のなめらかな皮膚の上に思わず知らずくちびるをすべらせた。きずたの葉やかしの葉で自分のために冠や首飾りや服を作った。彼女はそこへあざみの青い花々やあかいへびのぼらずや、緑の実のついている松の小枝を飾った。彼女のよそおいは、野生的な国の小さな王女みたいだった。そして彼女は、ふきあげの水のまわりをまわりながらたったひとりで踊った。それから両腕をひろげてぐるぐるとまわった。まわった。ついに頭がぐらぐらしてきて、芝生の上に身を倒した。顔は草の中に埋もれた。しかも何分間かは笑いがとまらなかった。なぜだかは自分でもわからなかった。

ふたりの子供の日々はこんなぐあいに過ぎていた。それぞれの生活が少しばかりの間隔を保ってたがいにかかわりをもたないでいた。――ただしアントワネットが通りがかりに弟をからかいたくなるときがあった。そんなとき彼女はひと握りのもみの針葉を弟の顔に投げつけたり、弟が登ってすわりこんでいる木を揺りうごかして、びっくりしている弟に、木からおとすとおどし文句を言ってみたりした。あるいはまた、オリヴィエに急に飛びかかって――

「うう！　うう！」

と叫んでオリヴィエをこわがらせた。

オリヴィエをからかいたい彼女の気持ちはときどき乱暴なほどだった。オリヴィエを木の上からおりて来させようとして彼女は、お母さんがオリヴィエを呼んでいるとオリヴィエに告げた。それからオリヴィエがおりて来るとアントワネットは自分がその木に登って行って、そこに陣どって動かなかった。するとオリヴィエはぐちをこぼし、お母さんに言いつけるからとおどかした。しかしアントワネットが木の上にいつまでもじっとしている気づかいなどはさらになかった。二分間だけでもじっとしていることはできなかった。オリヴィエを木の上から大いにからかって、オリヴィエがそのために本気になって腹を立て、そして泣きかかると、アントワネットは木から飛びおり、弟に飛びかかって、笑い声を立てながら弟をつかんで揺すぶり、彼のことを「だまされやすい坊や」と呼び、彼を地面にころがして、手につかんでいる草の葉で彼の鼻さきをこすった。弟は抵抗しようとした。しかし彼には力がなかった。すると、もう身うごきもしなかった。あおむけにされたときのこがね虫みたいに横たわったままで、そのやせている両腕をアントワネットのじょうぶな手でつかまれて芝草の上におしつけられていた。そして彼は悲しげにあきらめている様子だった。アントワネットはこの様子にはあらがえなかった。弟が敗北し降参して横たわっている有様を彼女は見つめた。彼女は急に大きな笑い声を立て、はげしく弟に口づけして、弟を自由にしてやった――だがその前に、「さようなら」の印に、新鮮な草の小さな束を弟の口へ押しこんだのだった。これはオリヴィエにはいちばんいやなことだった。なぜならそのため胸がむかつくような気持ちになったから。彼はつばをはいて口をふいた。憤慨して不服を言ったが、早くもそのときアントワネットは、笑い声を立てながら一もくさんに走り去った。

彼女はいつでも笑っていた。夜の眠りの中でさえも笑い声を立てて

いた。隣の部屋に寝ていてちっとも眠らずにいるオリヴィエは、自分で作った物語を自分自身へ話している最中に、アントワネットが夜の静寂の中で立てる気ちがいじみて大きな笑い声や、連絡のない言葉の断片を聞くとびっくりさせられて思わず身を起こすのだった。家の外では木々が風に吹かれて音を立て、一羽のふくろうの泣いているようななき声がきこえ、遠いあちこちの村や森の奥の農園から犬のほえ声がきこえてきた。オリヴィエは、夜のおぼろな薄明りの中に松の木のおもおもしい暗い枝々が幽霊みたいにうごめくのを見た。すると、アントワネットの笑い声がオリヴィエの心に安堵を感じさせた。

*

ふたりの子は非常に宗教的だったが、とくにオリヴィエがそうだった。彼らの父が反聖職主義的な考えを平気で口に出すのをきくとふたりの子らは気をわるくしていた。しかし父のほうでは子供たちの宗教上の態度に少しも干渉はしないでいた。そしてけっきょくのところ、宗教上の信仰をもたない多くの市民たちと同様に、父は、自分の家族の者たちが自分の代わりに信仰をもっていてくれることがまんざら腹立たしい気持ちでもないのだった。なぜなら、べつの陣営の中に同盟者をもっていることは常にいいことだ。幸運がどちらの側へ味方するかは決して測りしれないことだ。つきつめてみれば彼も神を信じているのだった。そしてしかるべき時が来れば彼もまたその父親がしたと同じように、司祭に来てもらうつもりだった。たといそれが無益なことであるにせよ、しかしそれは無害なことである。火事にたいする安全を確かにしておくことは、何も自分の身が必ず火で焼かれると確信していなくても、しておいていいことではないか。

病身なオリヴィエはミスチシスム（神秘精神）への好みをもっていた。彼は、おりにふれて自分がもう存在していないような気持ちがした。信じやすく、また愛情ぶかい性質だったので、支柱になるものが必要であった。彼は告解のときに、一種のせつない楽しさを感じるのだった。それは、目に見えない「友」に心をゆだねることの幸福感であった。その「友」の両腕はいつでもひろげられて自分を迎え取り、その「友」にはすべてをうちあけて話すことができる。謙虚と愛との気持ちにひたされて、その気持ちの沐浴によって心がさわやかに洗われて落ち着くことはたえなるうれしさだった。オリヴィエにとっては、神への信仰をもつことが生まれつき非常にしぜんなことだったために、人々が神への懐疑をもつという理由が彼には理解できないほどだった。それで彼はこう考えた——人が神を信じないというのはその人の悪意のせいか、それとも「信じられない心」を神からの罰として与えられているか、そのどちらかだと。神の恵みが父の心を照らすようにと彼はひそかに祈った。そして、ある日父といっしょに一つの村の聖堂の中にはいったとき、父が十字の印を胸の前でするのをオリヴィエは見てたいそううれしかった。オリヴィエの心の中では、聖書物語の中のいろいろなできごとが、リューベツァール（ドイツの「巨人山」の山霊）や、グラシューズとベルシネや、カリフ・ハルン・アル・ラシドのおとぎばなしとまじり合っていた、幼かったころには、聖書物語の中のできごとも、おとぎばなしの中のできごとも、どれもみなほんとうのことだと信じていた。くちびるの割れているシャカバックや、おしゃべりの床屋や、カスガールのせむしの小男に、現実の世界で出会ったことがないとは言えない気持ちであり、それだから散歩のときに、彼の目は、野原の中で、宝のありかをさぐり出す魔法の木の根をくちばしにくわえて飛んでいる黒いかささぎはいないかとさがすのだった。彼の子供らしい想像力の強さによって、ブルゴーニュやベリションの部落の光景がカナーンに見え、「約束の地」に見えるのであった。一本の色あせた古い羽みたいな形の小さな木がいただきに立っているたいそう丸い形の、あたりの丘が、彼には、アブラハムが火をたいた山であるように思われた。そして刈り株の並んでいる畑地のはずれに立って枯れている大きい一つの茂みは、炎が消えて以来すでにながいながい歳月

の過ぎ去った、あの〔旧約聖書の中のモーゼの〕「燃えるくさむら」であった。幼年期を過ぎて批判力がめざめるようになってからも、彼は、信仰のまわりを葉飾りのように取り巻くかずかずの民話伝説に心をゆだねて揺られながら夢みることが依然として好きだった。これが彼には大きい喜びであったために、話の内容の真実については批判していながらも、それを真実であるかのように思いこむことをおもしろがっていた。それゆえ彼は、かずかずの復活祭の鐘が、それに先立つ木曜日に空を飛んでローマへ旅立ち、小さなたくさんの吹き流しに飾られて空中をかえって来るのを復活祭の聖土曜日に心待ちするという気持ちをながいことなくさないでいた。けっきょくこんなことは事実としてありはしないと思うようになったが、しかしそれでも、それらの鐘の音が鳴るのを聞くときにはオリヴィエは依然として顔を空へ向ける習慣をもちつづけた。そしてあるとき一度彼は幻影を見た——そんなことは事実としてありえないとはよく知っていながら彼が見た幻影というのは、青いリボンをつけて空を飛んで行く一つの鐘が屋根の上方で消えてなくなるのが見える気がしたのである。

そんな伝説と信仰との世界の中へひたりこみたい彼の気持ちはどうにもならないほど強いものだった。彼は生活から脱出した。自分自身から脱出した。やせて顔いろがわるく病弱な者として生きることが彼には苦しかったし、またそれをそうだと人から口に出して言われるのを聞くのがたまらなかった。彼には生まれつき一種の厭世観があったが、これは確かに母からうけ継いだものであり、この厭世観は、病身なこの子供の心にかっこうの地盤を見つけたわけだった。しかし彼自身は自分のその厭世観を自覚してはいなかった。だれだって自分と同じように感じているものだとばかり彼は思っていた。そしてこの十歳の少年は気晴らしの時間に庭へ出て遊ぶかわりに、自分の部屋にとじこもって、おやつをかじりかじり、自分の遺書を書いていた。

彼はたくさん文章をつづっていた。毎晩こっそりと日記を熱心に書いていた。——なぜそんなことをするのか理由は自分でもわからなかった。なぜなら、とりたてて書きたいことが心にあるわけでもなく、書いていることはつまらないことばかりだったのだから。文章を書くことは彼の家族に代々伝わっている一つの嗜癖であり、それがオリヴィエにもあった。文を書きたいという要求はフランスの地方の市民——ふるくて不壊の種族——が何百年このかた持ちつづけてきているものであって、毎日自分自身のために書き、死ぬ日まで書きつづけ、ばかみたいな、そしてほとんど英雄的なしんぼうづよさで、その日その日に見たこと、言ったこと、したこと、聞いたこと、考えたこと、飲んだもの食べたもののことまでをこまかく書き記すのである。それはただ自分のために書くのであって、他のだれのためでもない。だれひとりそれを決して読んでくれはしないだろうことも自分で知っている。そして自分でもそれを決して読み返さない。

*

オリヴィエにとって音楽は信仰と同様に、あまりにけばけばしすぎる現実生活の輝きから彼をまもる一つの宿りであった。弟も姉も心から音楽的であり、——ことにオリヴィエは音楽の天分を母からうけていた。概して言えばこの弟と姉との音楽上の好みはまだ優秀とは言えなかった。この片いなかではたといどんな人にせよ音楽上の趣味を教養するわけにはいかなかったろう。ここできかされる音楽といえば、行進曲を奏する町の楽隊か、アドルフ・アダン作曲の——日曜や祝日に演奏される——混成曲か、民謡調の恋愛歌の旋律をひいて聞かせる、聖堂のパイプ・オルガンか、市民層のお嬢さんたちがピアノでひく楽曲かだったが、そのお嬢さんたちが調子の狂っているピアノでたたくのはワルツかポルカのダンス曲、『バクダッドの王さま』の、または『若きアンリの狩猟』の序曲、そしてモーツァルトの二、三のソナータ（奏鳴曲）であって——いつでも同じ曲がひかれ、いつでも同じ個所でまちがえていた。それらの曲は家へ客を招いた晩の集まりに必ずきまったように客に饗応されるプログラムの一部だった。晩さんの

後に、音楽の才のある人々はその腕まえを示すことを求められた。彼らは初めのうちは顔を赤らめて辞退するが、しまいには集まりの懇望もだしがたいということになり、彼らが覚えている長い楽節を譜面なしで演奏した。するとみなは、その人の暗記力に感嘆し、また「玉をころがすような」タッチのひき方をほめた。

ほとんど毎晩のようにくり返されるこんなおきまりの儀式じみた音楽がふたりの子供にとって晩さんをすっかりあじきないものにした。それからふたりがひきなれているバザン作曲の『支那旅行』か、ヴェーバーの小曲を連弾しなければならなかったとき、ふたりはたがいに頼り合ってひけたのであまり気おくれは感じなかった。しかしひとりだけでひかねばならないとなると、それはたいへんな苦しみだった。いつもそうであるようにアントワネットのほうが勇敢だった。つくづく閉口な気持ちではあったが、それでものがれられないとさとると覚悟をきめて、かわいらしい顔に決意を現わしながらピアノの前に行って腰をおろし、彼女にひける「ロンド」の曲をできる限りの急速度でひいてのけ、ある個所では音がもつれ、他の個所では引っかかり、急にひきやめて微笑しながら

「ああ！　覚えてるのはこれだけ……」と言った。

それからふたたび勇敢にひきだして、さらに数節を進んで、とうとうしまいまでひいた。すっかりひけた満足を彼女は隠さなかった。それからみなの賛辞を受けながら自分の席にもどり、笑い声といっしょにこう言った——

「ずいぶんひきそこなったわ！……」

しかしオリヴィエはそれほどらくな気持ちではやれなかった。人々の前で演奏してみなの注意の的になることが彼には耐えがたかった。人々の集まっている所では口をきくことさえも彼には苦痛だった。まして音楽を愛していない人々——（オリヴィエには、人々が音楽を愛していないとき、そのことがよく見抜けた）——音楽にはうんざりであるくせに、ただ習慣的にだれかに演奏させる人々、そんな人々のために演奏することは一種の非道だと彼には思われ、それにたいして大いに反抗したがむだだった。彼は強硬にこばんだ。ときどきはその場から逃げて行ってしまった。そして暗い部屋の中へ、廊下や、また屋根裏部屋——くもがいるのがこわかったにもかかわらず——へ隠れてしまった。彼が強硬にこばめばこばむほど催促はますます強まり、ますますいやおうを言わせないものになった。両親の叱責がそれにつけ加わった。反抗心があまりにも無遠慮に現われたばあいには、両親の叱責には平手打ちが伴うのだった。いつでも、とどのつまりは演奏するのをまぬがれなかった。——もちろんそれは、いやいやながら、ぶっちょうづらをしながらのことだった。そしてその晩にはあとでつらい気持ちがした。よくひけなかったのがつらいのだった。なぜならオリヴィエは音楽をほんとうに愛していたから。

この小都市の音楽上の好みも常に必ずしもそんなふうに凡庸であるばかりではなかった。回顧してみればある時代には二、三の市民の家庭でなかなかいい室内音楽がなされていたのであった。ジャンナン夫人は彼女の祖父のことをときどき話したが、その祖父は熱心なセロひきであり、またグルック、グレーラックそしてベルトンの旋律をうたっていた。さらにまた当時の厚い一冊の譜本や、イタリー歌曲集の一束が今でも家蔵されていた。なぜならあの愛すべき祖父は、「グルックを大いに好いている男だった」とベルリオーズに言われたアンドリュース氏みたいだったのである。ところでベルリオーズはにがにがしげにつけ加えて——「彼はまたピッチニをも大いに好いていた」と言った。——たぶんピッチニのほうをいっそう好いていたかもしれないのだった。いずれにせよ、あの祖父の蔵書の中にはイタリー歌曲集の数がはるかに多かった。これらの楽譜が少年オリヴィエのためには音楽上の日々のかてであった。あまり身にならないかてだった。それはいなかで子供たちにやたらに食べさせる砂糖菓子にいくらか似ていやなあと味を残し、胃をそこない、そしていっそう身になる食べものへの食欲を永久に起こさせなくなるおそれのあるものだった。しかしオ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com